

「しまね映画塾2011 in 安来」撮影現場の様子



## 「しまね式」映画塾9年目の挑戦

しまね映画祭が20周年を迎え、そこから生まれたしまね映画塾も9年目を迎えた。

毎年、春には塾生の募集を開始し、6月にガイダンスを開き脚本を募集、8月には約10組のチームを作り、基本的な技術講習の後、9月の連休に3日間の合宿をしてロケを敢行。そして10月には「10人の映画監督」の手によって編集が行われ、5分程度の短編が10本完成する。開催地で11月に10作品を一挙上映し、2カ月にわたるしまね映画祭が幕を閉じる、というわけだ。

誤解を恐れずに言えば、しまね映画塾はよくある「座学」などが中心の塾ではない。参加者は「ビデオカメラも回したことがない」人や「一生に一度でもいいからカメラの前で主役を演じてみたい」人など、映画撮

錦織監督

映画の現場から



## 垣根越え撮影現場に熱気

●●12

影の経験のない極々普通の人たちがほとんどである。

9年前、映画祭実行委員会が塾をしようということになった。当初は座学によるセミナー形式で行う予定であったが、参加者のほとんどがプロになりたいわけではないだろうから、と協議を重ねた結果、参加者全員が撮影を体験できる現在の形になった。経験のない人たちが集まって映画なんてできるの?という声が聞こえてきそうだが、そこがしまね映画塾の「胆(きも)」でもある。

老若男女、住んでいるところも職業も違う幅広い年代の人たちが一同に集い、寝食を共にしながら、もの作りに取り組む場は、社会に出てしまうと案外と少ない。誰かに頼まれたわけではなく自分たちがやりたいからやる、という熱気が映画塾の撮影現場にはあふれ、創意工夫が次々と生まれ、集中して作られた作品はプロもうなるモノさえある。100歳から乳飲み子までが立場を越えて垣根を作ることなく撮影に臨むからこそ、理屈では語れないエネルギーが生まれるのではないだろうか。文字通り「お祭り」なのである。

近年、県外者の参加も増え、初めて訪れる島根の地が映画塾の開催地だという若者も多い。ロケハンに何度も訪れるうちに塾生たちが異口同音に、知られざる島根の魅力を口にするようになるのもうれしい。背景には世界に自慢できる島根のコミュニティと環境があるからだと思っている。参加している私自身が、頭でっかちにならないで一歩前に出ることの大切さを「しまね式」映画塾に教えられている。

11月20日、安来での塾生作品発表会が今から楽しみである。(錦織良成・映画監督)